美しい違いを薄めてしまうこと

イアン・ポール（Ian Paul）、アンドリュー・バートレット（Andrew Bartlett） · ドイツ語訳：Hans-Jörg Ronsdorf · 2022年6月 · 2026年10月改訂

とりわけ米国で、また英語圏でも、女性が指導し教えることが許されるかどうかをめぐる議論が、再び活発になっています。それはまるで、十年に一度キリスト教界を、ここでは特に保守的な福音派の世界を通り抜けていく波のようです。しかし、聖書に基づいて女性を教えることと指導することから締め出すことができると考えている、いわゆる補完主義者たち（パイパー（Piper）、グルーデム（Grudem）、ケラー（Keller）、カーソン（Carson）、マッカーサー（MacArthur）、バーク（Burk）、デヤング（DeYoung）、デヴァー（Dever）、マティアス・ローマン（Matthias Lohmann）――ドイツでは少なからぬ自由教会や、E21、EBTC、KFGといった団体や出版社、あらゆる形態のブレザレン運動の教会、3L Verlagなど）の議論は、すべて検討し尽くされ、論駁されています。この論考は、女性の役割は階層的に従属するものだというこの主張を、改めて根拠づけようとするある文章を取り上げます。それはいくらか新しいアプローチですが、イアン・ポール（Ian Paul）とアンドリュー・バートレット（Andrew Bartlett）によるこの批判が示しているように、やはり的を外しています。

これはDeepL.comの助けを借りた作業用の翻訳であり、そのまま印刷できるような訳文ではありません。議論と反論をたどることができるように、意味の通る形で伝えることだけを目的としています。実際、私は（私自身にとって）いくつかの新しい考えを見いだしました。そして、この立場を完全に捨てたことは正しかったのだと、改めて確信させられました。

Hans-Jörg Ronsdorf　2022年6月28日、アウクスブルク

私は、**Men and Women in Christ: Fresh Light from the Biblical Texts**（IVP, 2019）の著者であるアンドリュー・バートレット（Andrew Bartlett QC）と手を組み、ニューフロンティアーズ（Newfrontiers）の講演者であり神学者であるアンドリュー・ウィルソン（Andrew Wilson）の「**Beautiful Difference: The Complementarity of Male and Female**」に対する聖書的な批判をここに示すことにしました。この批判の著者たちと賛同者たちについての詳しい情報は、本文の最後にあります。

ウィルソンによる補完主義の擁護

補完主義[1]は危機に瀕しています。

1991年、ジョン・パイパー（John Piper）とウェイン・グルーデム（Wayne Grudem）の編集による、補完主義の重要な著作 Recovering Biblical Manhood and Womanhood が出版されました。ところが2020年には、「Recovering From Biblical Manhood and Womanhood」が出版されました。その題名から、すでに内容が察せられます。著者のエイミー・バード（Aimee Byrd）は、米国の改革派の一教派――その教会では女性の指導者を認めていません――の中から書いている神学者です。

バードの本は、北米の代表的な補完主義者であるデニー・バーク（Denny Burk）によって書評されました。彼は、「補完主義から抜け出したい」と思っている世代がいることを率直に認めています。彼はこう警告しています。「出口を探している世代がいる。そしてバードはそれを提供している。」彼女の読者は「飛び降りる準備ができていて、そうするための、ある程度知的な口実を探しているだけなのだ。」[2]

テラン・ウィリアムズ（Terran Williams）は、補完主義に立つ南アフリカのある大きな教会の牧師です。彼は、教会の立場をよりよく擁護する議論を練り上げて書くよう頼まれました。ところが、その立場を徹底的に検証したとき、彼はそれを聖書によって擁護することはできないと気づいたのです。[3]

実際、多くの人が補完主義を離れつつあります。女性たちはキリストにある完全な自由を見いだしています。男性たちは女性たちを、本当の意味での同労者として、新しい目で見るようになっています。

しかし、**アンドリュー・ウィルソン**は、この流出を食い止めようと乗り出しました。彼は、ニューフロンティアーズの教会群に属するロンドン南東部のある教会で、教える牧師であり長老です。私たちは彼を、心の温かい、善意あるキリストにある兄弟として尊敬しています。彼は知的で思慮深い著者として知られていますが、それは正当な評価です。[4] **彼はおそらく、ヨーロッパを代表する補完主義の神学者でしょう。**

ウィルソンは、このアプローチのいくつかの側面を正当に批判しています。このアプローチが私たちの姉妹たちをおとしめてきたこと、戦後のアメリカを新約聖書の中に読み込んできたこと、三位一体について正統的でない見解を擁護してきたこと、そして異なる意見を持つ人々を不当に神学的リベラルとして片づけてきたことを、彼は認めています。それにもかかわらず、彼はその線を守ろうとし、家庭においても教会においても男性だけが指導すべきだと論じているのです。

彼は、聖書から信仰を汲み取っている多くのキリスト者が、補完主義を支持する標準的な議論に納得していないことを承知しています。**そのため、彼はもっと良い議論をしようと試みました。彼は補完主義を「相補性（コンプリメンタリティ）」と呼び直したいと考えています。そして、それをより広い聖書的な土台の上に据えたいと考えているのです。**彼はこれを、影響力のある論考「Beautiful Difference: The Complementarity of Male and Female」（男性と女性の相補性）の中で行いました。[5] 彼は家庭における男性の指導にも触れていますが、その議論は主に、教会における男性だけによる指導（男性だけの長老）を擁護することを目指しています。

この記事は魅力的で、美しく書かれています。そして実際、私たちも同意するいくつかの重要な真理がここには含まれています。[6] **しかし、この記事は、教会の指導を男性に限定するための、本当に確かな聖書的論拠を示しているでしょうか。私たちはそう思いません。**ウィルソンの教えは、その目的とは裏腹に、実際には男性と女性の間の美しい違いを損なっています。それは完全な相補性（互いに補い合うこと）に届いていません。男性を制限しない一方で、女性を、神が望んでおられない仕方で制限しているのです。この見解のどこが誤っているのかを知るために、どうぞ読み進めてください。[7]

ウィルソンの議論

まず、ウィルソンの議論の要約から始めましょう。彼は、よく用いられる証拠聖句によるアプローチから離れています。その代わりに、聖書全体からのアプローチをとろうとしています。彼の主な論点は次のとおりです。

1. 相補性は、男性と女性も含めて、神の創造の中に組み込まれている。
2. 男性と女性は異なるものとして造られている。それぞれの特性は、創世記1-4章から当然予想されるとおりのものである。そこでは男性（ヘブル語で「土」を表す語に似ている）は園を攻撃から守る務めを与えられ、女性エバ（「いのち」を表す語に似ている）は、生きるものすべての母と呼ばれた。
3. 男性と女性の相補性は、結婚、家庭、職場において表される。テモテへの手紙第一5章1-2節によれば、私たちは年配の女性を特に母親として、年配の男性を特に父親として、若い女性を姉妹として、等々、接するべきであり、性別のない存在や、性のない原子化された労働者として接するべきではない。
4. 中心となるのは、男性だけが教会の長老となるべきだということである。なぜなら、(a) 長老の務めは、群れの羊飼いとして教会を見張り、守ることであり、(b) 聖書の歴史のあらゆる段階において、神の民を見張り守る務めを託されているのは男性だからである。

(a) を支持するために、彼は使徒の働き14章22-23節、20章17-38節、テトスへの手紙1章5-9節、ペテロの手紙第一5章1-4節を挙げている。(b) を支持するために、彼は六つの実例と一つの教えの箇所から成る七つのテーマを挙げている。実例は、アダム、族長たち、レビ人の祭司たち、イスラエルの王政、十二使徒、そして聖書の結びに出てくる新しいエルサレムの特徴である。教えは、教会の長老の資格についてのパウロの一覧である。

5. 女性は聖書の歴史の中で大きな役割を果たしているが、女性として、男性の働きを補う仕方で仕えている。女性として、彼女たちは男性にはできないこと、あるいは男性がしないことを、あらゆる形で行うことができる。
6. 教会は一つの家族と見なされるべきである。したがって、女性が長老になれることを否定するのは、女性が父親に、男性が母親になれることを否定するのと同じである。

私たちは、聖書全体からのアプローチをとろうとするウィルソンの試みを評価します。しかし、彼の議論には明らかに欠陥があります。聖書の歴史に関しては誤っており、聖書神学とは矛盾しており、聖書釈義においては堅固ではありません。これらの点を一つずつ順に見ていきましょう。

聖書の歴史

ウィルソンによれば、聖書の歴史のあらゆる段階において、神の民を見張り守る務めを託されているのは男性です。これによって彼が言おうとしているのは、神の民を見張り守るよう神に召されているのは男性だけであって、女性ではないということです。

しかし、それはまったく事実ではありません。顕著な反例が彼の主張を覆します。

- イスラエルのエジプト脱出の際、民を安全に荒野を通って導くよう、モーセのほかに神によって定められたのは誰でしょうか。モーセの兄と姉、アロンとミリアムです。出エジプト記15章20-21節、民数記12章1-2節、ミカ書6章4節を参照してください。
- 「士師」の時代に、神はデボラを立てて、争いを裁き、預言し、民を戦いへと導くことによってイスラエルの民を指導させ、解放させておられます（士師記2:16-19; 4-5章）。
- ヨシヤ王の時代に、神はフルダを女預言者として召し、王と民を導いて信仰の復興をもたらされました（列王記第二22:11–23:3）。[8]
- 新約聖書では、プリスキラがエペソで生まれつつあった教会を、不十分な教えから守っています（使徒18:18-28）。ルカがこの話を語る仕方から、彼がこれを神の摂理と見なしていたことがうかがえます。[9] 彼女はまた、パウロの命を救うために自分の首を差し出す危険も冒しました（ローマ16:4）。[10]
- パウロとともに投獄されたユニアは、神によって使徒に召されました（ローマ16:7）。彼女の使徒職は、巡回伝道者であり教会開拓者であったアポロやバルナバの使徒職と同じ種類のものでした。[11] 使徒の教えは、教会を守り保護することに役立ちます。

ウィルソンが選んだ実例のいくつかでさえ、男性だけが神の民を守るよう神に召されていることを示してはいません。

第一に、アダム。ウィルソンは、アダムは「仕え、守るために」園に置かれた（創世記2:15）と言います。私たちは、「仕え、守る」という彼の訳が正しいものと仮定します。それがヘブル語本文の少数派の解釈であるとしてもです。[12]しかし、

1. 創世記2章は、園を守ることがアダムだけの務めであったとは言っていません。それどころか、女性はこの務めにおいて彼の助け手、あるいは「彼にふさわしい伴侶」であるはずでした（創世記2:18、1:28も参照）。

2. 聖書の用語法では、女性に用いられている「助け手」を表す語（'ēzer）には、「守る者」あるいは「救い出す者」という含みがあるように思われます。この語が使われているほかのすべての箇所で、文脈は、その助ける働きが守りや救出であることを示しており、多くの場合それはイスラエルに対する神の助けです。[13]

3. 園を守ることは、神の民を守ることではありません。[14]

第二に、族長たち。ウィルソンは、神がすべての族長に神の民を守る務めを与えておられる聖書箇所を一つも挙げていません。もし彼が、族長たちの何人かが実際に時折そうしていたという事実に依拠しているつもりなら、私たちも神の民を守った女性たちの例を挙げることができます。

アビガイルは、自分の夫と、その家の男たちを非業の死から救っています（サムエル記第一25章）。

ラハブは、男の斥候たちをかくまって守っています（ヨシュア記2章）。

名もない一人の女性が、テベツの人々を焼き殺されることから救っています（士師記9:50-57）。彼女は特に興味深い例です。彼女は、悪を打ち破るという神のご計画の一部として（56節）、防衛のための戦いの行為の中で（包囲していたアビメレク王に致命傷を負わせて）、力わざ（ひき臼の石を持ち上げること）を成し遂げています。しかし、アビメレクにとって女性に殺されることは社会的に受け入れがたいことだったので、彼は自分の道具持ちに剣を抜いて自分を殺すよう命じます。このことは、ご自分の目的を果たすために神が女性を守りや指導の役に任じることが、その文化の家父長制的な社会規範に反するものであったことを示しています。

アベル・ベテ・マアカの知恵ある女性は、侵入してきた軍隊から自分の町の男たちと女たちを守っています（サムエル記第二20章）。

エステルはユダヤ人を虐殺から救っています（エステル記2:19–9:19）。

箴言31章10-31節の力ある女性は、自分の家族と家の者たちだけでなく、貧しい者や困窮している者をも守っています。彼女は理想として描かれていますが、それは、描かれている特質が、一人の人にすべてそろっているわけではないにせよ、実在の女性たちの中に見いだされることを意味しています。[15]

第三に、新しいエルサレム。ウィルソンはこう書いています。

> 聖書の結びでは、女性である一つの都――私たちの性別が何であれ、神の民全体がそこに属している――が男性である贖い主によって救われ、ついには彼と結婚する。そして、その都の城壁とその土台には、男性の使徒たちと男性の族長たちの名が付けられている。

ウィルソンがなぜ新しいエルサレムを自分の主張の裏づけと見なしているのかは、はっきりしません。ヨハネの幻は、神の民を守る族長たちや男性の使徒たちについてのものではありません。

- ヨハネの黙示録21章12節では、（城壁ではなく）門に、イスラエルの子らの十二部族の名が書かれています。門は入り口です。これらの名は、誰が入ることを許されるのか、すなわち神の民全体を示しているのです（エゼキエル書48:30-35、黙示録7:4, 9を参照）。門は守りのためにあるのではありません。それは決して閉じられることがないのです（21:25）。
- ヨハネの黙示録21章14節では、都の城壁には十二の土台石があり、そこには「子羊の十二使徒の十二の名」が書かれています。「子羊の使徒」という呼び方は、「その血によって私たちを罪から解き放ってくださった」（黙示録1:5）方としてのイエスについての使徒的メッセージによって、教会が建てられたことを指しています。ここで問題になっているのは守りではありません。[16]

神は女性に、男性とともに治めるよう命じられました（創世記1:28）。そして、どうやら男性とともに守るようにも命じられたようです（創世記2:18）。ですから、創世記3章における人間の不従順の否定的な結果（「彼はあなたを支配することになる」――3:16）のあとでさえ、聖書の歴史の中に、このように治め守るふるまいのいくつかの証拠を見いだすことが予想されるでしょう。そして、まさにそれが見いだされるのです。ミリアムから箴言31章の力ある女性に至るまで、上に挙げた実例を見てください。

聖書神学

聖書を正しく理解するためには、新約聖書が描く、対立する二つの時代という考え方を心に留めておかなければなりません。

イエスが私たちを救い出してくださった今の悪の時代があり、そしてイエスが始められた来たるべき時代があります。来たるべき時代は、将来の復活と、新しい創造における万物の回復のときに、完全に現実のものとなります。その間、私たちは二つの時代が重なり合う中、すなわち「すでに、しかしまだ」の中に生きています。この考え方は、聖書の数多くの箇所にはっきりと表れています。[17]

来たるべき時代の成就は、エデンへの回帰ではありません。それは新しい、異なる未来であり、園ではなく都によって象徴されています（黙示録21:1–22:5）。ですから、創世記2章24節とは対照的に、復活のときには人々はめとることも嫁ぐこともありません（マタイ22:30）。子孫を残すことも必要なくなります。新しい創造は、あらゆる部族、国民、民族、言語から成る、だれも数えきれないほどの大群衆で満たされるのです（黙示録7:9; 19:6-7）。

もちろん、ウィルソン（Wilson）はこのことをすべて知っています。記事の冒頭で、彼は新しい創造についてこう書いています。

> 天と地の区別がなくなることが、男と女の区別がなくなることと結びついているのは、驚くにあたらない。

しかし、議論を展開していくうちに、この聖書の枠組みは忘れられてしまいます。**彼は、最初の創造と新しい創造の間に、あるいは古い契約と新しい契約の間に、本質的な違いなど何もないかのように論じています。彼は正しくもこう言います。「キリスト者は、この時代において男性と女性の相補性を表すよう召されている。」しかし、この召しが、今のこの人生において来たるべき時代の新しいいのちを表すようにという明確な召しによって、どのように条件づけられているかに注意を払っていないのです。**

新約聖書の文脈に忠実な仕方で考えていないことは、レビ人の祭司についての彼の発言に如実に表れています。

> 聖所を、したがってイスラエルの民全体を守る務めを託されたレビ人の祭司たちは、みな男性であり、しかも暴力の男たちである。彼らは一日中動物を殺して過ごし、そもそも祭司の務めに任じられたのは、同胞のイスラエル人を殺すほどヤハウェに対する熱心さを持っていたからである（出エジプト32:25-29）。

これが、教会の男性長老を支持するために言われているのです！**しかし、これは新しい契約の生き方とはまったくかけ離れています。**私たちが従っている贖い主は、武器を捨て、敵を愛し、迫害する者のために祈り、もう一方の頬を向け、仕返しをせず、善をもって悪に打ち勝ち、反対する者を柔和に正し、罪人を迷いから連れ戻すよう教えておられるのです。[18] 新約聖書では、信者として他者に暴力を振るうよう求められている信者は一人もいません。[19] 私たちの戦いの武器は霊的なものであり、この世の武器ではありません（コリント第二10:3-5）。パウロの「祭司として

の務め」は殺すことではなく、いのちについての神の良い知らせを宣べ伝えることにあります（ローマ15:16）。イエスに従うすべての者は、男性も女性も、血肉に対するものではない霊の戦いのために、霊的な武具で身を固めるよう召されています（エペソ6:10-18）。[20]

聖書神学の文脈で見るなら、レビ人の祭司職の意味は、ウィルソンの結論と真っ向から対立しています。古い契約の祭司職は、私たちの偉大な大祭司イエス・キリストの務めを先取りするものでした。その務めの中で、すべての信者が、男性も女性も、祭司となるのです（ヘブル2-10章、ペテロ第一2:9、黙示録1:6; 5:10）。レビ人の祭司職を、神の民の指導と保護についての教訓と見なすのであれば、その教訓とは、新しい契約のもとでは男性も女性もこれらの務めに召されているということなのです。[21]

最初の創造に基づくウィルソンの議論は、ここではまったく的外れです。キリスト者の奉仕を理解するために、男性が女性とどの程度違う「配線」になっているかを議論する必要はありません。確かに、男性は女性よりも筋力が強い傾向にあります。[22] **しかし、筋力のような身体的特性は、教会を指導するための資格ではありません。**長老であるためには、キリストにある新しいいのちを促し、養い、守るための、霊的な品性と賜物が必要なのです。

パウロが、創世記1章27節（「男と女」）にガラテヤ人への手紙3章28節（「男と女もありません」）で真っ向から反することを言う自由を持っているのは、まさにこの思考の枠組み（古い契約／新しい契約、今の時代／来たるべき時代、最初の創造／新しい創造）によるのです。その手紙の中で彼は、不従順によって損なわれた最初の創造と、イエス・キリストによって始まった新しい創造との対比を念頭に置いています（ガラテヤ1:4; 6:15）。キリストにある新しい創造においては、男性と女性はもはや以前と同じ意味を持ってはいません。キリストにあってユダヤ人と異邦人の区別が廃されたことが（身体的にはその区別は存続していたにもかかわらず）、神の新しい家族の中でのふるまいに影響を及ぼしたように（ガラテヤ2:11-21; 6:15-16参照）、キリストにあって男性と女性の区別が廃されたことも（身体的にはその区別は存続していたにもかかわらず）、ふるまいに影響を及ぼしました。女性たちは、福音のための正式な同労者となったのです。

キリストにあって新しい時代が始まりました。それはイエスの働きの中に予示され、十字架で死に打ち勝たれたことと、もはや決して死ぬことのない新しいいのちへのイエスの復活によって、決定的に始められました。この新しいいのちは、聖霊の賜物によって、イエスに従う者たちと分かち合われます。だからこそペテロは、ペンテコステの日に、来たるべき時代についてのヨエルの預言を引用しているのです（使徒2:17-18）。

> 「神は言われる。終わりの日に、わたしはすべての人にわたしの霊を注ぐ。あなたがたの息子や娘は預言し、青年は幻を見、老人は夢を見る。その日わたしは、わたしのしもべにも、はしためにも、わたしの霊を注ぐ。すると彼らは預言する。」

御霊による新しいいのちにおいては、古い社会的な区別は顧みられません。御霊はすべての人に与えられています。イエスが言われたとおりです。「『彼らはみな、神によって教えられる』と、預言者たちの書に書かれています」（ヨハネ6:45、イザヤ54:13の引用。エレミヤ31:31-34も参照）。

霊の賜物は――指導と教えのための賜物も含めて――御霊による神の国の時代の到来と結びついており、したがって性別の区別なく与えられています。

- 使徒の働き2章では、女性たちは預言することになっており（17-18節）、聖霊を受けた120人の群れの中に女性たちが実際に含まれていたことは明らかです。預言することは、指導の一つの形です。
- ローマ人への手紙12章3-8節では、「一人ひとり」に分け与えられる賜物の中に、預言、教え、指導が含まれています。
- コリント人への手紙第一12章では、「一人ひとり」（7節）に分け与えられる賜物の中に、知恵のことば（8節）、使徒、預言者、教師（28節）が含まれています。[23] ここで非常に目を引くのは、御霊が「みこころのままに、一人ひとりに」分け与えられ、その際、男女の区別がまったくほのめかされていないことです。
- エペソ人への手紙4章11節では、使徒、預言者、伝道者、牧師、教師の間に、性別による区別を示すものは何もありません（コリント人への手紙第一11章の女性の預言者たち、使徒の働き18章で教えるプリスキラ、そしてローマ人への手紙16章のパウロの女性の同労者たちにも注目してください）。
- コロサイ人への手紙3章16節では、戒めと教えによって教会を守る人は、男性でも女性でもありえます。
- ペテロの手紙第一4章10-11節では、「一人ひとり」が「神のことばを語る」ことを許されています。

補完主義の眼鏡をかけずに聖書を読むなら、これらの教えは、レビ人の祭司職がキリストにあるすべての信者の祭司職によって置き換えられたという教訓を裏づけています。**もしペテロとパウロが、教会の指導は男性だけに限られていると考えていたのなら、指導の賜物についての彼らの教えが、その制限をはっきりと示すことなく、男性と女性の両方に向けられているのはなぜでしょうか。霊の賜物についての教えは、新しい契約のもとでは、教会の指導に関して男性と女性の間に何の違いもないことを示しているのです。**

イエスが十二使徒を、ご自分の新しい運動の創設時の使徒として選ばれたことも、これと矛盾しません。確かに、彼らはみなユダヤ人であり、自由人であり、男性でした。**しかしイエスは、新しい契約が始まる前の過渡期に彼らを任命されたのです。**十二人の族長になぞらえて、彼らはイエスに従う者としての神の民の回復を象徴していました。

ペンテコステ以後、御霊の時代において、その後の教会指導者が異邦人や奴隷でもありえたことには、異論の余地がありません。十二人がユダヤ人であり自由人であったことは、そのような指導者に反対する論拠にはなりません。同じように、十二使徒が男性であったことは、のちの指導者が女性でありうることに反対する論拠にはならないのです。

聖書釈義

ここで、長老の務めは群れの羊飼いとして教会を見張り守ることだというウィルソンの主張と、教会の長老の資格についてのパウロの一覧に対する彼の解釈に目を向けましょう。ウィルソンは、その両方が長老の職を男性だけに定めていると考えています。

新約聖書によれば、長老の務めの一つが、群れの羊飼いとして教会を見張り守ることだという点には同意します。**しかし、「羊飼い」というたとえも、その務めの性質も、長老が男性でなければならないことを示してはいません。**

聖書では、羊飼いは男性だけでなく女性でもあります（創世記29:9、出エジプト2:16-17）。ですから、このたとえは性別に関する要件を含意してはいません。

務めの性質について言えば、身体的な戦いには女性よりも男性のほうが多く向いているという点には、私たちも同意します。現実の狼が現実の群れを襲うときには、もしかすると女性の羊飼いよりも男性の羊飼いのほうが適しているかもしれません。しかしそれは、男性にも女性にも共通する霊的な品性と賜物を必要とする、教会の長老職の務めとは何の関係もありません。

このことは、パウロが挙げている教会の長老の資格を見ると、非常にはっきりします。[24]

テモテへの手紙第一でパウロは、間違ったことを教えている（1:3）、資格のないある指導者たち（1:7）について懸念を表明していますが、彼らの性別は特定していません（1:3、ギリシア語tisin、tis――だれか、ある人――から）。テモテへの手紙第一2章15節で女性に言及した直後に、パウロは指導者の資格に話を移し、性別に中立的な導入の言葉で始めています。「もしだれか（tis）が監督の職に就きたいと思うなら……」（3:1）。

見かけ上の例外が一つあるだけで、パウロがそのあと列挙しているふるまいと基準はすべて、女性にも当てはまりえます。本能的にであれ意図的にであれ、パウロは、女性も長老職に必要な資格を備えうるというメッセージを強調しています。彼はそれを、テモテへの手紙第一とテトスへの手紙のほかの箇所で女性について書くときに、同じか、あるいは似たギリシア語の単語や考えを用いることによって行っています。テモテへの手紙第一の一覧を順に見ていきましょう。

- 長老職は良い働きです（3:1）。パウロは女性たちにも良い働きをすることを期待しています（5:10）。
- 長老は非難されるところのない者でなければなりません（3:2）。パウロは女性たちにも非難されるところのない者であることを期待しています（5:7）。
- 長老は節度のある者でなければなりません（3:2）。パウロは女性たちにも節度のある者であることを期待しています（3:11）。
- 長老は自制心のある者でなければなりません（3:2）。パウロは女性たちにも自制心のある者であることを期待しています（2:9, 15）。
- 長老は品位のある者でなければなりません（3:2）。パウロは女性たちにも品位のある者であることを期待しています（2:9）。

- 長老はよくもてなす者でなければなりません（3:2）。パウロは女性たちにもよくもてなす者であることを期待しています（5:10）。
- 長老は教える能力がなければなりません（3:2）。パウロは女性たちにも良いことを教える者であることを期待しています（テトス2:3）。
- 長老は酒飲みであってはなりません（3:3）。パウロは女性たちにも大酒飲みでないことを期待しています（テトス2:3）。
- 長老は金銭に貪欲であってはなりません（3:3）。パウロは女性たちにも、金や真珠や高価な衣服で身を飾らないことを期待しています（2:9）。
- 長老は自分の家庭をよく治めなければなりません（3:4）。パウロは女性たちにも家庭を治めることを期待しています（強い言葉despoteōを含む合成語を用いて）（5:14）。
- 長老は威厳をもって子どもたちを従わせなければなりません（3:4）。パウロは女性たちにも威厳を示すことを期待しています（3:11）。
- 長老は、高慢になって罪に定められることのないよう、新しく信者になった人であってはなりません（3:6）。パウロは女性たちにも、謙遜であって罪に定められることのないよう期待しています（5:10, 12）。
- 長老は外部の人々にも評判の良い人でなければなりません（3:7）。パウロは女性たちにも、ほかの人々から良い評判を得ていることを期待しています（5:7, 10）。

パウロはさらにいくつかの特質を挙げています。柔和であること、暴力的でないこと（1:13を参照！）、争いを好まないことです（3:3）。これらの特質が女性にも見られることには異論の余地がありません。つまりパウロは、男性にも女性にも確かに見られうる、少なくとも十六の特質やふるまいを列挙しているのです。彼は、女性もこれらの資格を満たしうることを前提としているように思われます。

パウロのこうした考えは、彼が神の民の世話について述べているほかの発言、それも女性的なイメージを含む発言とも一致しています。彼は、テサロニケの人々の間での自分とシルワノとテモテの働きを、幼子のように優しく、自分の子どもたちを育てる乳母のようであったと描いています（テサロニケ第一2:7）。ガラテヤの人々への働きにおいては、新約聖書の中でも最も驚くべきたとえの一つの中で、自分を、子を産む苦しみをしている身ごもった女性のように見ています（ガラテヤ4:19）。

これらはすべて、長老の資格は典型的に男性的な守りの務めを想定しており、もっぱら男性に向けられているというウィルソンの考えとはかけ離れています。テキストは一貫して、それがパウロの考え方とは合わないことを示しているのです。

資格の一覧の中の唯一の見かけ上の例外は、長老はmias gunaikos andra、文字どおりには「一人の妻の夫」でなければならないということです（3:2）。この言い回しは、キリスト教の性倫理の基準――乱れた性関係を持たず、一夫多妻でないこと――に合致していることを指しています。**文脈と、ギリシア語という言語の仕組みからすれば、この言い回しはここでは一般的な意味で、すなわち男性にも女性にも当てはまるものとして理解されるべきです。（ギリシア語の著者が男性と女性の両方を指そうとするとき、男性を表す名詞を用いるのは普通のことです。）**[25]

長老の資格についてのパウロの性別に中立的な言い回しは、テモテへの手紙第一3章の英語訳になじんでいる読者を驚かせるかもしれません。英語訳では伝統的に、パウロのギリシア語には出てこない男性形の代名詞や形容詞が数多く使われているからです。**しかし、ダグラス・ムー（Douglas Moo）やトム・シュライナー（Tom Schreiner）といった、著名で非常に有能な補完主義の学者たちも、資格の一覧の文言が女性を除外していないことでは一致しています。**[26] **ジョン・パイパー（John Piper）とウェイン・グルーデム（Wayne Grudem）でさえ、そのことを受け入れているように見えます。**[27]

私たちはパウロの一覧を普通「資格」と呼んでいますが、ほとんどすべての学者と教会の権威者たちは、正しくも、それを規定というよりは目安として理解しています。それは、長老職の資格を法的に定義した教会規則ではなく、親しい同労者への手紙の中の助言なのです。私たちは、長老に結婚していること（2節の字義どおりの読み方）や、少なくとも二人の子どもがいること（4節）を求めている大きな教会団体を一つも知りません。もしこれが規定として意図されていたのなら、パウロ自身も、さらには大牧者である主イエスでさえ、教会の長老としての資格がないことになってしまいます。

では、この一覧を、長老職が男性に限られるという意味に解釈するウィルソンの理由は何でしょうか。彼は七つの点を挙げています。

第一に、彼は、長老は「男性であることが前提とされている」と言います。もし彼が、パウロは多くの長老が男性であることを前提としているという意味で言っているのなら、私たちも同意します。しかし、パウロは長老が男性だけであることを前提としているという意味で言っているのなら、彼は間違っていると私たちは考えます。**一覧の中にそのような前提はありません。** mias gunaikos andra **を男性だけを指すものとして読む確かな理由はないからです。**しかし、たとえウィルソンの第一の点が正しいとしても、それによって彼の立場が裏づけられるわけではありません。多くの場合に当てはまる前提は、条件ではないからです。

第二に、彼は、長老は「一人の妻の夫」でなければならないと言います。これはmias gunaikos andraという言い回しのことを指しています。ウィルソンは、この文脈の中でこの語を総称的に理解することがなぜ不適切だと考えるのかを説明していません。**ウィルソンの立場は、次のことと衝突します。パウロは（1）一覧を性別に中立的な形で始め、（2）十七の特質やふるまいを列挙し、そのうち十六は（パウロの考えでは）確かに女性にも見られるものであり、（3）十七番目を（ギリシア語の構造からして）性別に中立的に読むことのできる仕方で表現しています。それにもかかわらず、（4）その十七番目を、長老は男性でなければならないという規定的な要件として理解させようと意図していた、というのです。これは信じられません。**

それはまた、この一覧が規定というよりは目安であるという理解とも矛盾します。ウィルソンの見解に従えば、ジョン・ストット（John Stott）が牧師として教会に仕えることを許した人々は、ストットが独身だったために、神のことばに従わなかったことになってしまいます。

第三に、ウィルソンはこう言います。

> 教会は、父親と母親の両方を持ち、またその両方をぜひとも必要としている家族である（たとえば5:1-2）。そしてこのことは、パウロが監督を父親と見なしていることを強く示している。

しかし、この議論の論理は理解しがたいものです。教会が父親と母親の両方を必要とする家族であるなら、それはむしろ、男性と女性の両方が長老であるべきだということを意味するはずです。

第四に、彼は、家庭をよく治め、子どもたちを従わせておくという要件（3:4）が、パウロが長老を男性と見なしていることを「強く示している」と考えています。しかし、女性も家庭を治め、子どもを育てているのですから、[28] ウィルソンの確信の根拠は見えてきません。

第五に、彼は教える能力という要件（3:2）を論拠にしています。

> パウロはちょうど、それを女性に禁じたところである（2:12。彼がそれによって正確に何を意味していたかについて数多くの議論があるという事実は、明らかな関連を見ることを妨げるべきではない）。

しかし、数多くの議論は、そう簡単には片づけられない深刻な問いを投げかけています。補完主義に立たない学者たちは、2章12節を、特定の女性たちによる誤った教えを禁じたものと理解しています。テモテへの手紙第一2章12節の補完主義的な翻訳と解釈には、本当の難しさがあります。たとえば次のようなものです。

パウロの手紙は誤った教えと戦うことを目的としているのに（1:3以下）、なぜ2章12節を、女性による誤った教えの禁止としてではなく、女性による正しい教えの禁止として読むのでしょうか。

もしパウロが一般的な規則を定めようとしているのなら、なぜ彼はouk epitrepō――「私は許さない」――と言っているのでしょうか。聖書のどこにも、この表現が一般的な規則を定めるために使われている例はありません。

もし2章12節でパウロが、教会における正当な牧会的権威の行使を問題にしているのなら、なぜ彼は、権威の行使を表す通常の語の一つではなく、authenteōという動詞を使っているのでしょうか。

補完主義者たちはauthenteōを「権威を持つ」あるいは「権威を行使する」と訳しますが、パウロ以前の時代、パウロの時代、さらにはおよそ300年後までの間に、この意味での明確な用例を一つとして挙げることができません。[29]

しかし、教えることについてのウィルソンの議論は、補完主義的な読み方をとったとしても的を外しています。パウロは5章17節で、すべての長老が教えるわけではないことをはっきりさせているからです。[30]

第六に、彼は3章11節を指摘します。そこでは、3章8節で始まり3章12節で続いている執事の資格の途中で、女性がはっきりと言及されています。3章11節を根拠に、ウィルソンは、パウロが女性を長老として想定していたことは「ほとんどありえない」と考えています。しかし、それは誇張です。注解者たちは、3章11節の意図について確信を持っていません。英語訳も、パウロが3章11節

で「女性たち」について語っているのか、「執事の妻たち」について語っているのか、「女性執事たち」について語っているのかについて一致していません。注解者たちは五つの異なる解釈を提案しています。

一つの単純な読み方はこうです。パウロは2章15節で女性について語り、それから長老の資格の一覧を性別に中立的な導入の言葉で始めています（3:1）。そのため読者には、最初の一覧が男性と女性の両方に向けられていることがすでに明らかです。ところが執事の一覧は、いきなり男性形の語「diakonous」で始まっています。そこで彼は、口述しながら、自分が男性だけを念頭に置いているのか、女性も念頭に置いているのかを示す合図を出す必要があることに気づきます。その合図を彼は3章11節で出しているのです。彼は女性の執事と男性の執事の両方について語っています。アンドリュー・バートレット（Andrew Bartlett）は、この単純な読み方を支持しています。テラン・ウィリアムズ（Terran Williams）はほかの解釈を支持していますが、それらもウィルソンの見解とは相容れません。[31]

さらに、私たちがすでに見たように、ウィルソンは、女性にふさわしい特質とふるまいを含む長老の資格の一覧の一般的な言葉遣いを考慮に入れていません。したがって、3章11節の意味についてのウィルソンの判断にはほとんど重みがありません。**そして、もしパウロが本当にすべての教会に対して男性だけが長老になれるという規則を定めようとしていたのなら、なぜ彼はどこにもそれをはっきりと誤解の余地なく言っていないのでしょうか。なぜ彼は、執事についての箇所から長老について不確かな結論を引き出すことを、読者に任せているのでしょうか。**

第七に、ウィルソンはこう述べています。

> 平等主義の解釈者たちでさえ、これらの要件が「監督を夫および父親として描いている」（タウナー（Towner））こと、また「パウロは一貫して監督を一人の男性として呼んでいる」（ライト（Wright））ことに、しばしば同意している。少なくともこのテキストにおいては、長老職は性別に中立的ではない。

しかし、この主張は十分な調査に基づくものではありません。

フィリップ・タウナー（Philip Towner）の引用は、テモテとテトスへの手紙についてのタウナーの注解書から取られたものです。それは、mias gunaikos andraの意味をめぐる彼の議論の一部です。ウィルソン（Wilson）は、タウナーが書いていることを正しく伝えていません。タウナーは、資格要件が監督を夫であり父である者として描いている、とは書いていません。彼が実際に書いているのは、「この規定の**家庭についての前提は**……監督を夫であり父である者として描いている」ということです（強調は筆者）。こうして私たちは再び「前提」の議論に戻ってきます。この議論については、私たちはウィルソンともタウナーとも意見を異にしますが、いずれにせよ、前提は要件ではないのですから、この議論は空振りに終わります。

トム・ライト（Tom Wright）の注解の意味についてのウィルソンの説明は、私たちの見るところ、さらに誤解を招くものです。この引用は、「すべての人のためのパウロ」（Paul for Everyone）シリーズの、牧会書簡についてのライトの信仰書から取られています。ウィルソンは、ライトの注解を、「長老職は性別に中立ではなく」、もっぱら男性に限られているという見解を支持するも

のとして紹介しています。それは、ライト自身の見方とは正反対です。ライトが言っていることは次のとおりです。

> パウロは監督を一貫して男性として言い表しています。新約聖書の残りの部分を読むと、私は、これはむしろ、ギリシア語の文法が通常は両方の性をまとめて指すからであり、また教会の初期には、ほとんどの教会の指導者がおそらく男性だったからだと考えます。私はこれを、女性をこの特別な奉仕と召しから締め出すものだとは見ていません。

一世紀のギリシア語についての専門的な理解に基づいて、平等主義のライトは、補完主義者のムー（Moo）やシュライナー（Schreiner）と同じく、パウロの資格要件の一覧に女性の排除を見ていません。

では、パウロの一覧を女性を長老職から締め出すものと解釈するためのウィルソンの七つの理由について、私たちはどこに行き着くのでしょうか。そのどれ一つとして説得力がありません。この点では、ムーとシュライナーとライトが正しく、ウィルソンは間違っています。

真の相補性

私たちはここまで、ウィルソンの中心的な主張を検討してきました。それは、聖書の物語のあらゆる段階において、神の民を見張り、守る務めを負っているのは男性である、という主張です。私たちは、この主張が聖書の物語に関しては誤っており、聖書神学と矛盾し、聖書釈義においても筋が通っていないことを確認しました。ウィルソンの論考は、補完主義の聖書的な基盤を示すことに失敗しています。

ウィルソンの立場の実態は、男性と女性の間の美しい違いを台無しにしてしまうということです。そうなってしまうのは、この立場が、神のかたちに造られた男性と女性の、聖書が語る完全な相補性を否定しているからです。この立場は、男性を制限しない一方で、神が意図しておられない仕方で女性を制限します。女性が教会の指導に貢献することを妨げてしまうのです。

それによって教会は、神が教会に与えてくださった賜物と資源を奪われてしまいます。補完主義者のウェイン・グルーデム（Wayne Grudem）は、正しくもこう言っています。

> 神は女性に多くの洞察と知恵をお与えになりました……そして……女性の知恵を活かすことを怠る教会指導者は皆、本当に愚かなことをしているのです。[32]

しかし、ウィルソンの論考にはさらに誤っている点があります。

性の違いの過度な強調

ウィルソンの理解する聖書の物語では、女性はもっぱら女性として、男性を補う仕方で仕えています。彼はおよそ26の例を挙げて、こう言います。

> これらのどの場合にも、当の女性たちは、まさに女性として神の民に仕えています。

彼はこう説明します。

> これらの例の力は、女性には男性にはできない、あるいは男性がしないあらゆることができ、またその逆も言えるという事実にあります。

これは、イエスの母マリアのような場合には容易に理解できます。母になれるのは女性だけです。しかし、彼のほかの多くの例は、奇妙だと言ってよいでしょう。たとえば、

- デボラはイスラエルを率います。しかし男性もイスラエルを率いることができ、実際に多くの男性がそうしました。
- ハンナとマリアは、聖書に収められている詩篇や歌を作ります。しかしダビデやアサフもそうしています。
- フルダとピリポの娘たちは預言します。しかし多くの男性もそうします。
- クロエは教会を指導しています。しかし男性もそうします。
- リディアは商売を営んでいます。しかし男性も商売を営むことができ、多くの男性がそうしています。
- ユウオディアとシンティケは、福音におけるパウロの同労者です。しかし多くの男性もそうです。パウロは、テモテ、アポロ、シルワノ（シラス）、テトスを言い表すのにも、同じギリシア語（sunergos）を用いています。
- ユニアは使徒です。しかし多くの男性も使徒です。

イスラエルを率いること、歌を作ること、預言すること、教会を指導すること、事業を営むこと、福音のために共に働くこと、使徒として働くことは、父や母の務めのように性別に固有の務めではありません。

ウィルソンは、人間のあらゆる活動を性によって区別されたものと見る考えにすっかりとらわれているため、テモテへの手紙第一5章1-2節を誤って読み、誤って適用しています。

パウロはテモテにこう勧めています。「年配の男の人を叱ってはいけません。むしろ、父親に対するように勧めなさい。若い男の人には兄弟に対するように、年配の女の人には母親に対するように、若い女の人には姉妹に対するように、まったく純粋な心で勧めなさい。」（ESV）ウィルソンは、この勧めの文脈が「神の家族の中での人との接し方」であることを認めています。しかし彼は、これは「職場でも」当てはまると考え、同僚をはっきりと父、母、姉妹、兄弟として扱い、「性別に中立な単位や、性のない均質な労働者」として扱わないようにと私たちに勧めます。

女性の法律家や科学者は、キリスト者の法律家や科学者が職場で自分に対して、何よりもまず同僚として――その性別は仕事にとって（せいぜい）ささいな意味しか持たない同僚として――ではなく、何よりもまず母や姉妹として接してきたら、奇妙に思うことでしょう。ウィルソンは、創世記1章27節から導き出した、彼自身の以前の戒めを忘れてしまったようです。

> 男性と女性は共に神のかたちを担っており、私たちのアイデンティティは、性別によってよりも、人間であることによって、はるかに根本的に定められています。私たちは第一に人間であり、男性か女性であるのは第二のことにすぎません……

この戒めこそが正しい釣り合いを取っています。女性の指導者や働き手は、第一に指導者や働き手として仕え、第二に女性として仕えます。女性として、彼女は男性とは異なる資質や洞察の組み合わせをもたらすかもしれません。これは確かに相補性の利点ですが、彼女の指導や仕事の主要な特徴ではありません。[33]

結論

補完主義の中には、ふだんは神のことばを注意深く扱う、賜物豊かな聖書教師が大勢います。しかし、男性と女性について考えるとなると、それが霧を生み出し、彼らの読み方と考え方を損なってしまうようです。[34]

ウィルソンは、教会は家族として見られるべきだという指摘で締めくくっています。私たちもそれに同意しますが、彼は、これが指導を男性に限ることを正当化するものだと誤って考えています。

> 女性[sic]が長老になれることを否定するのは、女性が最高経営責任者になれることを否定するように聞こえますが、むしろ、女性が父親になれること、男性が母親になれることを否定するのに似ているのです。」[35]

私たちの兄弟に対するあらゆる敬意を払いつつも、これは混乱しており、聖書的ではありません。

混乱しているというのは、相補性の本来の目的に反しているからです。ウィルソン自身がこう言っています。

> キリスト教においては、男性と女性が共に神のかたちを担っており、男性も女性も、相手なしにはそれを十分に表すことができません。

男性と女性は同じであり（神のかたちに造られた人間）、また互いに異なってもいます（男と女として造られた）。同じであるかぎりにおいて、男性も女性も良い品性を示し、霊的な指導の資質を持つことができます。異なるかぎりにおいて、指導に対して異なる貢献をすることができます。イエスご自身は神の完全なかたちでしたが、教会の指導者はイエスではありません。実際には、教会の指導者が男性と女性の両方であるとき、神のかたちが十全に表されることが容易になります。美しい違いは、共同の指導の中に現れるのです。[36]

聖書的でないというのは、聖書がどこにおいても、「父親」を教会の長老の比喩として、あるいは彼らを言い表すことばとして用いていないからです。家族としての教会という聖書の比喩は、この地上のどこかの牧師を家長として描くのではなく、神を父として、神の民を子どもたちとして描いています（ヨハネ1:12-13）。そこではイエスが長子であり、信者たちはその兄弟姉妹です（ローマ8:29、ヘブル1:5-6; 2:10-11）。私たちの指導者は、キリストにある私たちの年長の兄弟姉妹です。信者たちは神の家族であって、長老たちの家族ではありません。

改めて強調しておきたいのは、女性も男性も奉仕と指導を担うことができるという理解は、女性と男性がまったく交換可能で違いがないという意味ではない、ということです。両者とも指導できると信じることは、性自認をめぐる世俗的なイデオロギーへと滑り落ちることではありませ

ん。その意味で、私たちは、ウィルソンが論考の前半で創造における違いについて述べていることの多くに同意します。しかし、後半で展開されている、長老職への適格性に絶対的な区別を設けることは、私たちが示したとおり誤りです。

美しい違いをゆがめる補完主義は、今なお多くの教会と多くの信者を害し、制限し続けています。それは聖書的ではありません。必要でもありません。それは悲劇です。霧を吹き払いましょう。それを後にする時が来ています。

著者について：

アンドリュー・バートレット（Andrew Bartlett QC）、Men and Women in Christ: Fresh Light from the Biblical Texts（IVP, 2019）の著者。

イアン・ポール博士（Dr. Ian Paul）、フリーランスの著述家、神学者、ブロガー。英国ノッティンガムのセント・ニックス教会（St. Nic's Church）協力牧師、英国シェフィールドのセント・ヒルド・カレッジ（St. Hild College）客員講師。以前は英国ノッティンガムのセント・ジョンズ・カレッジ（St. John's College）の教務部長および新約聖書講師。

この批判は次の人々によって支持されています。

カティア・アダムズ（Katia Adams）、米国のザ・テーブル・ボストン教会（The Table Boston Church）主任牧師、Equal: What the Bible Says about Women, Men and Authority（David Cook, 2020）の著者。

サイモン・ベナム（Simon Benham）、英国のケリス教会（Kerith）主任牧師。

テラン・ウィリアムズ（Terran Williams）、『How God Sees Women: The End of Patriarchy』（『神は女性をどう見ておられるか――家父長制の終わり』）（Spiritual Bakery, 2022）の著者、南アフリカ・ケープタウンのシグナル教会（Signal Church）牧師。

原文：Ian Paul、Andrew Bartlett「Spoiling the Beautiful Difference」、psephizo.com、2022年6月24日、https://www.psephizo.com/biblical-studies/spoiling-the-beautiful-difference/

注

1. 補完主義とは、1970年代から1980年代にかけて米国で発展した聖書解釈の体系です。それは、家庭と教会における男性だけによる指導を擁護するために、男性と女性の「役割」という社会学的な概念を聖書解釈に持ち込みました。補完主義は、より広い社会において男性だけによる指導を一様に求めてはいないという点で、歴史上の改革派の見解の多くとは異なっています。
2. Denny Burk, "Eine Wegstation zum Egalitarismus: Ein Kommentar zu Aimee Byrd's Recovering from Biblical Manhood & Womanhood"、2020年7月7日。https://equip.sbts.edu/article/way-station-egalitarianism-review-essay-aimee-byrds-recovering-biblical-manhood-womanhood/ で閲覧可能。
3. 彼は、Terran Williams, How God Sees Women: The End of Patriarchy (Spiritual Bakery, 2022) の中で自らの経緯を語り、聖書を解説しています（www.terranwilliams.com またはAmazonで入手可能）。
4. 出版された彼の博士論文についての好意的な書評はこちらを参照してください：https://www.psephizo.com/biblical-studies/does-god-discipline-those-whom-god-loves/ また、彼のすぐれた著書 God of All Things についての彼へのインタビューはこちら：https://www.psephizo.com/reviews/what-can-the-material-world-teach-us-about-god/.

5. 2020年11月20日に彼のウェブサイトThink Theologyで公開：https://thinktheology.co.uk/blog/article/beautiful_difference_the_complementarity_of_male_and_female 若干の修正を加えて、2021年5月20日にゴスペル・コアリション（Gospel Coalition）のウェブサイトで再公開：https://www.thegospelcoalition.org/article/beautiful-complementarity-male-female/
6. たとえば、男性と女性は同一ではなく、入れ替え可能でもないという指摘です。その前半の紹介は https://www.psephizo.com/gender-2/beautiful-difference-the-complementarity-of-male-and-female/ を参照してください。
7. この記事の枠を越えないように、私たちの議論は家庭ではなく教会の指導に焦点を当てています。私たちは、結婚と家庭についてのウィルソンの議論が、結婚と男女の人格的関係についての新約聖書の中で最も長い箇所（コリント人への手紙第一7章）をまったく考慮していないことを指摘しておきます。それは、パウロが結婚における権威と意思決定について明確に教えている唯一の箇所です。この箇所は、夫と妻が同じ権威を持っており、決定は互いの合意によってなされるべきであること（4-5節）を示しているので、補完主義者たちにとってはいささか都合の悪いものです。詳しくは、Andrew Bartlett, Men and Women in Christ: Fresh Light from the Biblical Texts (IVP, 2019)、第2章を参照してください。
8. ミリアム、デボラ、フルダについて、また彼女たちの指導的役割を小さく見せようとする補完主義の試みへの応答については、Men and Women in Christ、91-94頁（第5章、"Women's leadership and authority in the Old Testament" の項）を参照してください。
9. ほとんどの注解者は、使徒の働き18章19-21節のギリシア語は普通ではなく、一貫していないと指摘しています。自然な読み方は、プリスキラとアキラがそこで教会を設立したというものですが、ルカは、教会の始まりにパウロが深く関わっていたことに触れるよう心がけています。Howard Marshall Acts (TNTC) 1980, 301; Ben Witherington Acts of the Apostles 1998, 557-8 を参照。
10. 教会の主要な教師の一人であったアポロをプリスキラが正したことについては、Men and Women in Christ、207, 227頁（第11章、"The nature of the disagreement" の項、および "3. Authoritative teaching as a special category?" の項）、240頁（第12章、"The historical context" の項）を参照してください。
11. ユニアの使徒職については、Men and Women in Christ、299-306頁（第14章、"Women's prominence in the young churches" の項）を参照してください。教会の全歴史を通して、補完主義が最近登場するまで、ユニアは宣教する使徒と見なされていました。彼女がパウロとともに投獄されたのは、おそらくその際立った地位のためでしょう。ウィルソンも自分の記事の中で、ユニアが使徒であったことを正しく認めています。
12. Bible Gatewayにある54の英語訳（2022年5月時点）のうち、ヘブル語の**שָׁמַר**を「見張る（守る）」と訳しているのは四つだけです。さらに四つが「見守る」と、一つが「番をする」と訳しています。NIVとESVは一般的な合意を反映しています（"to work it and take care of it"; "to work it and keep it"）。
13. 'ēzerが使われている文脈については、出エジプト18:4、申命記33:7, 26, 29、詩篇20:2; 33:20; 70:5; 89:19; 115:9-11; 121:1-2; 124:8; 146:5、ホセア13:9、イザヤ30:5、ダニエル11:34を参照してください。（これらの箇所のいくつかでは、期待された守りが与えられないことが問題になっています。）
14. さらにウィルソンは、アダムが堕落の責任を負っており、私たちはみなエバではなくアダムにあって死ぬのだと言います。しかし、創世記3章では、アダムとエバの両方が神によって責任を問われています。創世記2-3章を誤解しないためには、著者が、個人としての「アダム」と「人類」という意味での「アダム」という二重の意味を巧みに用いていることに注意しなければなりません。たとえば創世記3章22-24節では、表面上はアダムだけが追放されていますが、意味されているのは人類です。コリント人への手紙第一15章22節のパウロの議論は、人類の代表としての「アダム」という考えに基づいています。
15. もしかすると彼女は、レムエル王の母が王の将来の妻として思い描いているような女性なのかもしれません。箴言31:1を参照。
16. 黙示録21:12-14についてさらに詳しくは、Ian Paul, Revelation (Tyndale New Testament Commentaries), 349-350を参照してください。
17. いくつかの例として、マタイ19:28、マルコ10:30、ルカ20:34-35、コリント第二5:17、エペソ1:21、テトス2:12、ヘブル6:5を参照してください。このテーマとその意義についての簡潔ながら包括的な研究としては、Ian Paul, Kingdom, Hope, and the End of the World; living in the now and not yet of eschatology (Grove Books, Cambridge, 2016) があります。
18. ルカ22:49-51、マタイ5:39, 44、ペテロ第一2:21-23、ローマ12:17-21、テモテ第二2:25、ヤコブ5:20。
19. ルカ22章38節（「それで十分」）は、たしなめの言葉であるか、あるいは、ゲツセマネの園への道のりとそこでの滞在が途中で妨げられないようにするには剣が二本あれば足りる、という意味の言葉であるかのどちらかです。ローマ人への手紙13章1-4節で説明されているのは、教会の働きではなく、国家権力の働きです。

20. ウィルソン自身、2022年5月5日にこう書いています。「イエスは、自分自身を守るためであれ、罪のない人々を守るためであれ、決して人に対して暴力を用いられなかった。イエスは弟子たちに、同じように生き、悪に手向かわず、もう一方の頬を向けるよう教えておられる（マタイ5章、ルカ6章）。弟子が福音の働きの中で暴力を用いようとしたり、暴力を用いると脅したりするたびに、たとえそれが罪のない人々を守るためであっても、キリストは彼をたしなめておられる（ルカ9章と22章、ヨハネ19章）。使徒たちは、イエスの苦難を、信者が従うべき模範として繰り返し示している（ローマ12章、ピリピ2章、ペテロ第一2章）。……私たちの戦いは、この世の敵との戦いでも、この世の武器による戦いでもない（エペソ6章）。キリスト者は殺すことによってではなく、死ぬことによって勝利する。子羊の血と、自分たちの証しのことばによって、また死に至るまでも自分のいのちを惜しまないことによってである（黙示録12章）。」
https://thinktheology.co.uk/blog/article/how_should_christians_think_about_gun_control

21. また、特別な（男性の）レビ人の祭司職が生まれたこと自体が、イスラエルの失敗のしるしであることにも注意すべきです。それは、民が金の子牛によって偶像礼拝へと誘い込まれたあとに初めて生まれたものであり（出エジプト32章）、それに反対して立ち上がったのはレビ人だけでした（26-29節）。ご自分の民に対する神の最初の意図は、民全体が「祭司の王国」となることでした（出エジプト19:6）。そしてこの幻は今、キリストにあって、キリストを通して実現しているのです（黙示録1:6）。

22. ペテロの手紙第一3章7節は、この事実をほのめかしています。ペテロはそれによって、キリスト者の男性は妻に対して思いやりをもつべきだと言おうとしているのです。これは身体的な相補性の興味深い一例です。というのも、持久力、痛みへの耐性、寒さへの耐性に関しては、女性のほうが一般に男性よりも強いからです。

23. コリント人への手紙第一14章26節では、11章2節から14章33節に見られるように、預言や教えを携えてくる人は男性でも女性でもありえます。ここでの「教え」を表す語はdidachēであり、これはコリント人への手紙第一14章6節のパウロの教えや、イエス、使徒たち、テモテ、長老たちの教えにも用いられている語です（マタイ7:28、使徒2:42、テモテ第二4:2、テトス1:9）。コリント人への手紙第一14章34-35節における女性の発言の制限については、この2節がパウロに由来しない付加であることを示す有力な写本上の証拠があります。これを真正なものと考える人々は、まだ（a）その真正性の主張と合致する、本当にありそうな証拠の説明も、（b）それが文脈にどのように収まるかについての納得のいく読み方も示していません。Men and Women in Christ、第9章と第10章を参照してください。

24. 一覧は二つあり、テモテへの手紙第一3章1-7節とテトスへの手紙1章5-9節にあります。テモテへの手紙第一の箇所のほうが、いくらか詳しく書かれています。私たちの一覧の概観は、Men and Women in Christ、318-319頁（第15章、"Do Paul's requirements include or exclude women?" の項）から取ったものです。

25. たとえば使徒の働き17章34節では、ダマリス（女性）が、パウロが語りかけ（17:22）、パウロのメッセージに応答したandres（男たち）の中に含まれています。詳しい議論は、Men and Women in Christ、319-323頁（第15章、"Do Paul's requirements include or exclude women?" の項）にあります。ヘブル語の用法も同様です。「あなたの隣人の妻を欲してはならない」（出エジプト20:17）という戒めは、女性が隣人の女性の夫を欲することを許しているわけではありません。

26. Douglas Moo, 'The Interpretation of 1 Timothy 2:11-15: A Rejoinder'. (1981) TrinJ 2, 新シリーズ: 198-222, 211; Tom Schreiner, 'Philip Payne on Familiar Ground: A Review of Philip B Payne, Man and Woman, One in Christ" (2010) JBMW 15, 第1号: 33-46, 35.

27. Recovering Biblical Manhood and Womanhood: A Response to Evangelical Feminism, 56.

28. 箴言1:8、使徒16:40、コリント第一1:11、コロサイ4:15、テモテ第一5:14、テモテ第二1:5; 3:14-15。

29. テモテへの手紙第一2章についてさらに詳しくは、Men and Women in Christ、第11-13章および付録3-6、ならびにHow God Sees Women、第7章を参照してください。

30. 資格の一覧は規定というよりは目安なので、テモテへの手紙第一3章2節（「教える能力がある」）と5章17節（一部の長老だけが説教し、教える）の間に矛盾はありません。また逆に、賜物を与えられた人は、長老でなくても教えることができることにも注意してください（コリント第一14:26、コロサイ3:16）。

31. さらに詳しい点と解釈の提案については、Men and Women in Christ、325-326頁（第15章、"Do Paul's requirements include or exclude women?" の項）、およびHow God Sees Women、付録5、339-341頁を参照してください。

32. Systematic Theology: An Introduction to Biblical Doctrine (1994), 944.

33. 社会における性の区別が実際にどのような影響を持つかを考える際には、男女の違いの大部分は、個々の人間どうしの違いよりも小さいということを思い起こすと役に立ちます。最も速い男性ランナーは最も速い女性ランナーよりも速いのですが、女性の短距離走者は男性の神学者よりも速く走ります。

34. この現象のさらにいくつかの例については、アンドリュー・バートレットが自著に対するいくつかの奇妙な書評に短く答えた 'Complementarianism and a listening problem?'（Word from the Bird、2022年3月11日

公開、https://michaelfbird.substack.com/p/complementarianism-and-a-listening?s=r）を参照してください。（ただし、私たちの意図をあまり深読みしないでください。平等主義への党派的・イデオロギー的な肩入れが同じような結果をもたらした例も、私たちは見てきました。）

35. 歴史的に見ると、男性だけが指導できると考えた神学者たちは、この制限を教会の指導にだけ選択的に当てはめるのではなく、一貫して社会全体に当てはめてきました。https://www.psephizo.com/biblical-studies/the-historic-reading-of-1-tim-2/ を参照してください。
36. ここで付け加えておくべきことは、これは女性と男性が同じ人数で指導者や教師や大会の講演者になるべきだという意味ではなく、単に、女性を指導的立場から全面的に禁じることには聖書的な正当性がない、という意味にすぎないということです。この問題についての議論は、https://www.psephizo.com/gender-2/should-women-be-on-platforms/ とその続編の記事にあります。